

平成 29 年度 入学宣誓式 学長告辞

本日ここに入学宣誓式を迎えられた、学部生 659 名、大学院博士前期課程 506 名、博士後期課程 39 名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。

今日、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びです。新入生の皆さんは、希望と喜びをもって、今日の入学宣誓式に臨まれたことと思います。

京都工芸繊維大学は、教職員数約 450 名、学生数約 4000 名、工芸科学部・工芸科学研究科の一学部・一研究科の国立理工系大学です。歴史的には京都蚕業講習所及び京都高等工芸学校を淵源とし、日本の産業の近代化を支え、高度成長における理工系人材を養成し、100 年以上にわたり、時代の要請に応じて教育研究領域を変化・発展させてきました。

現在、本学は柔軟な教育体制と研究力の強化を図る観点から、「学域」、「学系」、「機構」という 3 つの組織化を行い、教育、研究、社会貢献といった役割を明確にしました。

とりわけ教育上大切なのは「学域」です。学生の皆さんは学部においては 9 課程、大学院修士においては 15 専攻、大学院博士においては 8 専攻のいずれかに所属します。本学は、これらを生命物質科学域、設計工学域、造形科学域、繊維学域、基盤教育学域の 5 大領域に編成し、その強みと特色を活かした教育を行っています。この教育上の「学域」という区分は本学の特色ある研究活動とも深く関連しています。国立大学のミッション再定義において、「デザイン・建築」及び「高分子・繊維材料」、さらには、「電子工学によるグリーンイノベーション」の領域において強みと特色があると認められましたが、加えて、本学の昆虫研究や微生物研究は世界的にもユニークな研究であり、生物、化学、工学、造形、繊維の 5 大分野において「科学と芸術の融合」を目指して教育・研究を展開しています。

また、本学の教育システムも注目されています。まず「3×3」と名付けられた教育体系によって、入学後3年間を基礎教育、4年次と修士2年間を合わせた3年間を実践教育、博士3年間を研究教育とする、9年間を見通した体系化を行っています。また学部1学年600人に対し、修士は1学年500人と、9割近くの方が修士に進学することから、学部と大学院がシームレスに連続する教育体制としています。修士を中心にクォーター制を導入し、メリハリのある学年歴によって、インターンシップや海外研修などの体験学習や実践教育を推進します。新入生の皆さんほぼ全員が、インターンシップを体験し、海外研修を経験してから就職することになります。今日から英語のスキルアップには十分留意してください。

今日の入学宣誓式にあたり、京都工芸繊維大学が掲げる理念を踏まえ、「科学と芸術」と「ものづくり」、「知と美と技」に通底する「ものづくり」について改めて考え、新入生の皆さんに「ものづくり」というものが、学術文化にどのように貢献してきたのかを伝えたいと思います。

そもそも、学問の府である大学においては、理論的考察が第一義であり、個別具体の技術は一段低くみられる傾向があります。ものづくりは、技術的で、現場主義であり、身体的で、言葉にすることが苦手な世界であり、理論化することが難しい営みです。このため、ものづくりは理論研究より低くみられる傾向が出てきます。しかし私たち理工系大学においては、実践的なものづくりが、いかに社会の役に立っているかだけでなく、真理の探究においても、人間の理解においても、哲学と同等の役割を果たし、学術文化の形成に寄与してきた歴史を深く認識しなければなりません。我々が、アカデミズムの世界においても、実務の世界においても、自覚と自信をもって活躍するためには、ものづくりという領域に、理論的な根拠、あるいは歴史的な根拠のあることを確認することが必要です。

例えば、「隠喩としての建築」という著作の中で、柄谷行人は次のように指摘しています。

「古代ギリシャにおいて、哲学者を定義するにあたって、建築家を哲学者の隠喩として用いたことはよく知られている。ギリシャ語において、建築はアーキテクトンというが、この語は、始原や始まり、原理を意味するアルケーと職人を意味するテクトンの合成語である。つまり、ギリシャ人にとって、建築は単なる職人の技術ではなく、原理的な知識をもち、個別の技術や職人を統括し、製作を企画立案、指導する技術と理解されていた。語源の詮索はともかく、重要なことは、プラトンやアリストテレスが哲学者を建築家になぞらえ、哲学を知の建築、知的構築物と見なした点である。プラトンはその著「饗宴」の中で、「あらゆる技術に属する製作は、創作であり、それに従事する工作者は創作者なのである。」と言っている。」

ものづくりの本質は、世界を構築するという作業です。西洋文明の起源であるギリシャにおいても、偉大な職人は哲学者と肩を並べ、世界をもので構築するか、言葉で説明するかの違いはあるものの、両者の役割に違いはなかったのです。皆さんは、本学が展開してきた実践的な教育研究活動に自信と誇りをもって、これからの学生生活を送っていただきたいと思います。

ここで、新しい学生生活に飛び込もうとする皆さんの夢と期待と不安に関連した具体的な事例を紹介したいと思います。皆さんはもちろん、いかなる難しい課題に対しても、真摯に取り組み解決策を見いだすための覚悟はできていると思います。皆さんの不安は、どのような困難な課題が待ち受けているかという不安よりも、むしろ無限に広がる可能性、茫漠とした夢の大きさに戸惑っているのではないのでしょうか。

大学の研究は、無限に広がる自由な空間から、具体的な課題を構成することから始まります。研究の始まり、学習の始まり、そしてこれからの長い人生をどのように始めるのか。物事の始まり、つまり始原というものは常に神秘に満ちており、不安と魅力でいっぱいです。人の誕生、生命の始まり、宇宙の始まり、研究上の発明、これらは抗しがたい魅惑と不安と神秘に満ちています。

かつて本学図書館において、詩人の谷川俊太郎による小さなゼミが開かれました。そのとき一人の学生が、詩というものはどのようにして生まれるのかと質問しました。谷川さんは「心を空っぽにしてじっと待ちます。言葉が生まれる前の、遠くの世界からはじめの一言がやってくるのを待つのです。」と答えています。これはモーツァルトが曲を創るときや、一瞬のシャッターチャンスは何日も何年も待っている写真家の姿勢にも似ています。

また、スイスの建築家ピーター・ズントーは、「新入生諸君にまず伝えなければならぬことはどんなことだろうか。」と問うています。彼は「はじめに言うべきことは、答えが最初からわかっている問いを出す教師はいないということ。建築することとは、おのれに向かって問うこと、教師の助けを借りながらも自分で答えに近づき、迫り、発見することである。そのくり返しである。」と述べています。

彼は続けて「すぐれた設計をする力は、自分自身のなかに、世界を感性和知性の双方でとらえる能力のなかにある。すぐれた建築デザインは感覚的である。と同時に、知性的である。」とも語っています。

彼は「学生時代には、設計とはまったく新しいものを創造することであるという考えに取りつかれ、どんな課題に対しても今までにない新しい答えを見つけ出そうと躍起になっていた。しかし、社会に出て実務を行う上では、歴史を学ぶこと、皆が知っている建築を深く理解することが、実践的で理性的な態度である。」と述懐しています。

設計すること、学習すること、そして創造することについての先人たちの言葉は、大変興味深く、私自身も同感することが多くあります。新入生の皆さんは、本学の活動指針である「科学と芸術の融合」を目指して、「知と美と技」を磨いていただきたい。社会に有用なものづくりをおこなうために、「知と美と技」の統合をめざして、ものに込められた理念が感得できるまで、手に宿る哲学が実感できるようになるまで、ものづくりの極限に向かって、研鑽を積んでいただきたいと思います。

京都工芸繊維大学は、強い個性を有する工科系の国立大学として、急速に社会的な認知度を上げています。2013 年には文部科学省「知の拠点整備事業COC」、つづいて2014年には「スーパーグローバル大学創生支援事業SGU」、さらに2015年には「COC+事業」に採択されました。また、リクルート進学総研が高校生を対象に行った「進学ブランド力調査」では、ここ数年来、志願度も上昇しています。

学生の皆さんの活躍はめざましく、日経キャリアが行った、全上場企業対象の「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」、つまり就職力ランキングにおいて、全国国公立大学 800 校中総合 17 位、独創性において第 7 位の評価を得ています。朝日新聞の調査では、本学の学生は勉強時間の長さではベスト 10 に入っています。また、全日本学生フォーミュラ大会においては過去 5 年間に優勝 2 回、準優勝 1 回、5 位が 2 回、さらに「トビタテ！留学 JAPAN」という、文部科学省が実施している官民協働海外留学支援制度の採用者数は、理工系大学の中で 2 位となるなど、本学学生の技術力・知識・実践力の高さが実証されています。また、本学の教育方法も、日本機械学会教育賞、日本建築学会教育賞を受賞したことなどにみられるように、学会や社会から高く評価されています。今日入学された新入生の皆さんも、先輩の実績を遙かに越えた活躍をされることを期待しています。

本学は国際交流を活性化するため、ユニット招致と呼ばれる方法でケンブリッジ大学やスタンフォード大学、あるいはスイスのETHや英国のRCAといった海外の有力大学から講座やグループを招聘し、共同研究や共同教育を行っています。また、タイのチェンマイ大学とジョイント・ディグリー制度によって大学院に新専攻を開設し、今年 4 月から共同教育を実施します。またバンコクにおいてキングモンクート工科大学産学連携センターに共同研究の拠点を開設し、ラジャマンガラ工科大学においても教育研究拠点を開設しています。日本国内では、京都府北部の京丹後市サテライトキャンパス及び新シルク産業創造館、綾部市では綾部地域連携室、福知山市には福知山キャンパスを設置しました。

こうした大学活動の盛り上がりと活性化を好機とし、私たちは世界に冠たる大学になろうとしています。君たちも、海外で活躍できる人材、現場でリーダーシップを発揮できる人材、我々が「テックリーダー」と呼ぶ人材を目指して学習していただきたいと思います。

現状でもすでに 500 人規模の学生がインターンシップに出かけ、また海外に出かけています。松ヶ崎キャンパスでの基礎的教育を踏まえ、皆さんも全員が企業インターンシップと海外研修に参加し、社会性と実践力を磨いて就職することになります。常に海外に出かける準備を整えておいてください。

今日から皆さんが学ぶ大学、京都工芸繊維大学をよく知り、そして好きになること。それが自らの学習と研究活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。松ヶ崎の地にあっても、その研究成果や教育成果は、常に世界とつながっており、海外からも見られていることを意識して学生生活を送ってください。そして、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、勉学に励み、卒業していただきたいと思います。

勉学や研究において、多くの感動を体験し、それらを友人と共有することによって、実り豊かな学生生活を送られることを祈念して、お祝いの言葉といたします。

平成 29 年 4 月 5 日
京都工芸繊維大学長
古山 正雄